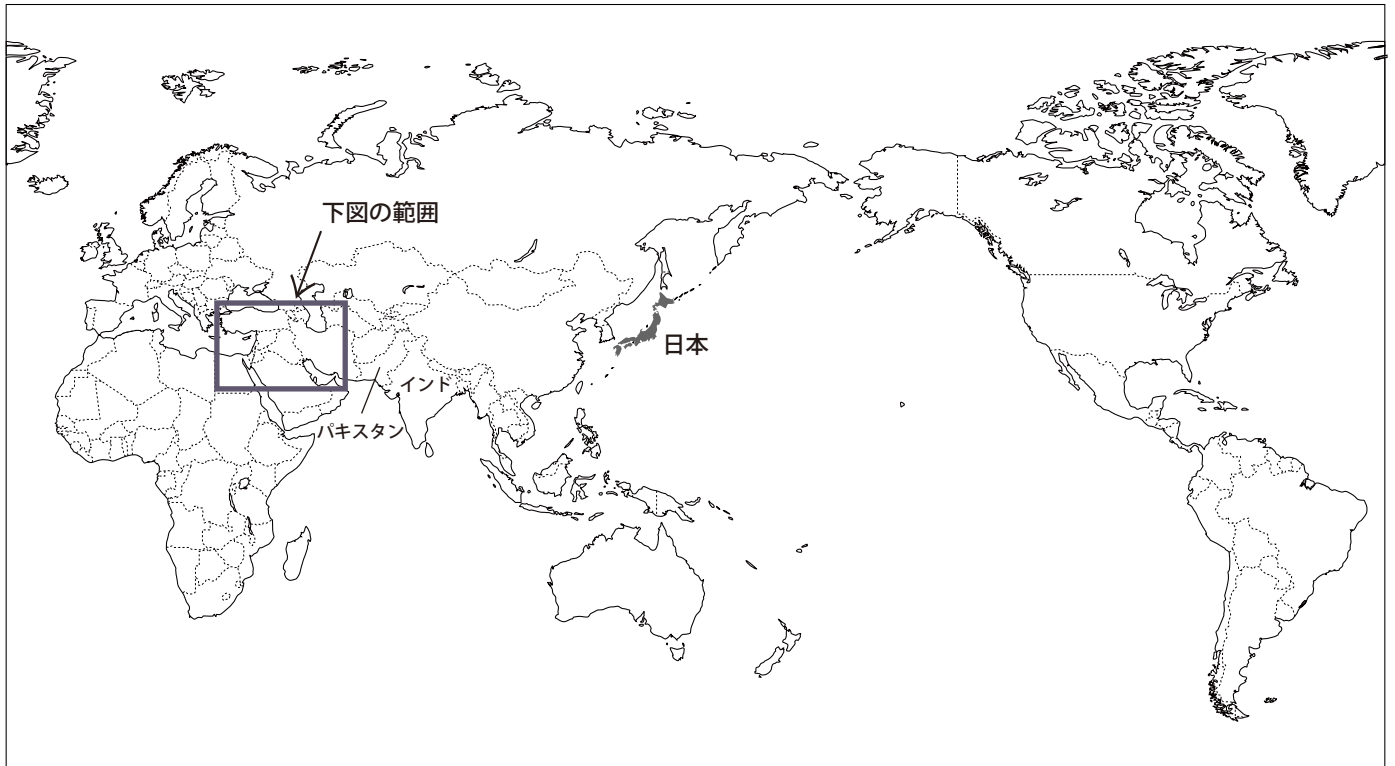


# 西アジア考古学講義ノート

Introduction to West Asian Archaeology

日本西アジア考古学会  
西アジア考古学講義ノート編集委員会 編





世界における西アジアの位置と現代の国々

# 西アジア考古学年表

14C 較正年代 / 暦年代	地域 / 時代区分	南レヴァント	北レヴァント	北メソポタミア	南メソポタミア	イラン高原	アナトリア	日本	
		(イスラエル・ヨルダン)	(シリア西部・レバノン)	(シリア東部・イラク北部)	(イラク南部)	(イラク東部・イラン西部)	(トルコ)		
2000000	下部 旧石器時代	オールドワンの						旧石器時代	
1500000		← アシュურიアン →				← アシュურიアン →			
1000000			← ヤブルディアン / アムッディアン →						
500000	中部 旧石器時代	← レヴァント地方 ムステリアン →				← ザグロス地方 ムステリアン →		旧石器時代	
400000			← 上部旧石器初頭 (エミラン) →						
300000	上部 旧石器時代	← 前期アハマリアン →						旧石器時代	
200000		← レヴァント地方 オーリナシアン →							
100000		← 後期アハマリアン →				← バロドスティアン →			
50000	終末期 旧石器時代	← ケバラン/ネベキアン →						縄文時代 (草創期) (早期)	
20000		← 幾何学ケバラン ムシャビアン →				ザルジアン トリアレティアン			
10000	先土器 新石器時代	← ナトゥーフィアン →						縄文時代 (草創期) (早期)	
9000		← PPNA →							
8000		← PPNB 前期 →			北メソポタミア PPN	原新石器	アナトリア PPN		
7000	後期 新石器時代	← PPNB 中期 →						縄文時代 (草創期) (早期)	
6000		← PPNB 後期 →				ザグロス PN	アナトリア PN		
5000	銅石器時代	← PPNC →	← 初期 PN/PPNB 末期 →					(前期)	
4000		ヤルムーク	PN	原ハラフ ハッスーナ サマツラ	ハラフ I	ウバイド 0	古拙スシアナ		前期銅石器
3000		カティフ	アムーク C	ハラフ II	ウバイド 1	ウバイド 1	スシアナ前期		ハラフ II 中期銅石器
2500	前期 青銅器時代	ガッスール	アムーク D	北方ウバイド前期	ウバイド 2	ウバイド 2	スシアナ中期前葉	(中期)	
2000			アムーク E	北方ウバイド後期	ウバイド 3	ウバイド 3	スシアナ中期後葉		
1500					ウバイド 4	ウバイド 4	スシアナ後期 1		
1000	中期 青銅器時代			LC1	ウバイド 5	ウバイド 5	スシアナ後期 2	(中期)	
500				LC2	ウルク前期	ウルク前期	スーサ I		LC1
300				LC3	ウルク中期前半	ウルク中期前半	スーサ II		LC2
250	後期 青銅器時代	EB I A	アムーク F	LC4	ウルク中期後半	ウルク中期後半	スーサ III	LC3	(後期)
200		EB I B		LC5	ウルク後期	ウルク後期	スーサ III	LC4	
150		EB II	アムーク G	EB I	ジェムデット・ナスル	ジェムデット・ナスル	スーサ III	EB I	
100	鉄器時代	EB III	アムーク H	EB II	初期王朝 I	初期王朝 I	エラム古王国	EB II	(晩期)
50		EB III	アムーク I	EB III	初期王朝 II	初期王朝 II	エラム古王国	EB II	
0		EB III	アムーク J	EB IVa	初期王朝 IIIa	初期王朝 IIIa	スーサ IV	EB III A	
500	鉄器時代	EB IV/MB I		EB IVb	初期王朝 IIIb	初期王朝 IIIb	スーサ IV	EB III B	(晩期)
400					アッカド	アッカド		EB III C	
300					ウル第三王朝	ウル第三王朝			
200	中期 青銅器時代	MB II	MB I	古アッシリア	イシン・ラルサ	イシン・ラルサ	エラム中王国	キュルテペ	(晩期)
150		MB III	MB II		古バビロニア	古バビロニア		カールム	
100									
50	後期 青銅器時代	← LB I →		ミッタニ	カッシート	カッシート	ヒッタイト古王国	ヒッタイト古王国	(晩期)
0		← LB II →					ヒッタイト新王国	ヒッタイト新王国	
500				中アッシリア	イシン第二王朝	イシン第二王朝	鉄器時代 I	新ヒッタイト	
1000	鉄器時代	鉄器時代 I	鉄器時代 I						弥生時代
500		鉄器時代 II A	鉄器時代 II A	新アッシリア			ウラルトゥ	ウラルトゥ	
300		鉄器時代 II B	鉄器時代 II B				エラム新王国	エラム新王国	
200	紀元前 時代	鉄器時代 II C	鉄器時代 III				メディア	メディア	弥生時代
100							アケメネス朝ペルシア	アケメネス朝ペルシア	
50									
300	ヘレニズム 時代	← セレウコス朝シリア →							古墳時代
200									
100									
200	ローマ 時代	← ローマ →							古墳時代
100									
50									
400	ビザンツ 時代	← ビザンツ →							飛鳥時代 奈良時代 平安時代
300									
200									
600	イスラーム 時代								鎌倉時代 室町時代 安土桃山時代
500									
400									
800	イスラーム 時代								鎌倉時代 室町時代 安土桃山時代
700									
600									
1000	イスラーム 時代								鎌倉時代 室町時代 安土桃山時代
900									
1500	イスラーム 時代								鎌倉時代 室町時代 安土桃山時代

※ その他の地域 (湾岸諸国、コーカサス、内陸乾燥域、エジプト、インド・パキスタン) については、第 2 章各節を参照してください。

# 目次

<b>第1章 西アジア考古学概説</b>	1
1.1 西アジア考古学の意義と歴史	3
1.2 西アジアの自然環境	7
1.3 旧石器時代(1)	11
1.4 旧石器時代(2)	15
1.5 新石器時代(1)	19
1.6 新石器時代(2)	23
1.7 銅石器時代(1)	27
1.8 銅石器時代(2)	31
1.9 青銅器時代(1)	35
1.10 青銅器時代(2)	39
1.11 青銅器時代(3)	43
1.12 鉄器時代(1)	47
1.13 鉄器時代(2)	51
1.14 ヘレニズム・ローマ・ビザンツ時代	55
1.15 イスラーム時代	59
<b>第2章 西アジアとその周辺の地域史</b>	63
2.1 イラン	65
2.2 イラク	67
2.3 湾岸諸国	69
2.4 シリア・レバノン	71
2.5 ヨルダン・イスラエル	73
2.6 トルコ	75
2.7 コーカサス	77
2.8 内陸乾燥域	79
2.9 エジプト	81
2.10 インド・パキスタン	83
<b>第3章 西アジア考古学の資料と研究法</b>	85
3.1 石器	87
3.2 土器	89
3.3 金属器	91
3.4 遺構	93
3.5 動物骨	95
3.6 植物遺存体	97
3.7 人骨	99
3.8 地理空間情報	101
3.9 文字資料	103
<b>第4章 文献リスト・関連情報</b>	105
4.1 文献リスト	107
4.2 関連情報	111

## 1.3 旧石器時代 (1)

西アジアの旧石器時代は約 180 万～1 万年前である。この期間は、下部、中部、上部、終末期の 4 期に区分されるのが一般的である。本章では下部と中部旧石器時代を対象に、その考古学的記録の内容と意義、研究課題を紹介する。

### 日本がまだ無人の頃…

現在の考古学や古人類学の知見によると、日本列島における人の居住の起源は約 4 万年前であるが、彼らはどこから来たのであろうか。日本列島がまだ無人島だった頃、アフリカとユーラシア大陸では、ヒトのさまざまな進化が起こり、世界に拡散した人類のドラマがあった。日本人の起源、さらにはヒトの起源について少しでも興味を持つならば、その起源地と目されるアフリカからユーラシア大陸への玄関口に位置する西アジアに残された下部・中部旧石器時代の遺跡は多くのことを語ってくれる。

### 1) 下部旧石器時代

#### 西アジア最古の人類はいつ、誰か？

西アジアにおける最古の人類居住の証拠は現在のところ南コーカサスのグルジア共和国内、ドマニシ遺跡（約 180 万年前）から見つかっている。発見されたヒトの化石は、その頭や体の特徴から、いわゆる原人（ホモ・エレクトゥスやホモ・エルガスター）の初期段階を示すといわれ、ホモ・ゲオルギクスという新たな種も提案されている（図 3）。つまり、人間はアフリカにおいて約 600～500 万年前にチンパンジーと進化の枝分かれをして直立二足歩行をするようになった後（いわゆる猿人）、数百万年たつてようやく原人に進化した直後にアフリカを出てユーラシアの新天地に足を踏み入れたということになる。そのドマニシ原人であるが、意外にも石器技術は出アフリカを果たす前のヒト（猿人）とそれほど変わりがなく、石を単純に打

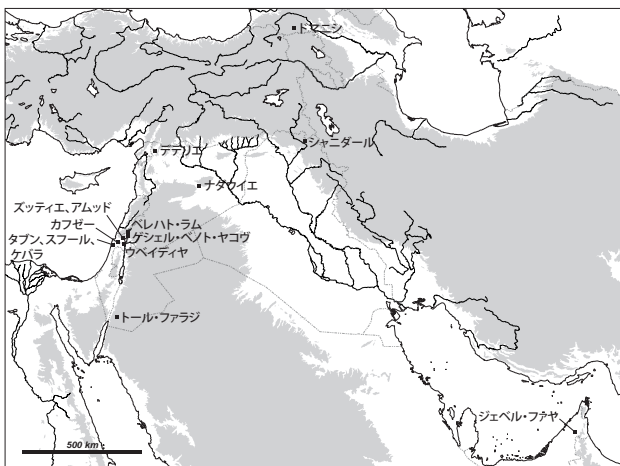


図 1 本文中で触れられる下部と中部旧石器時代の遺跡



図 3 ドマニシから出土した原人の化石 (Gabunia et al. 2001)

ち割っただけの剥片や礫器であった。出土した多くの動物骨には、前期更新世のユーラシアに特有な種が含まれ、それが示す古環境は草原とある程度の森林である。

#### アシュール文化が示すヒトの技術革新

ヒトの技術はいつ、どのような環境で発達するのだろうか。西アジアで最古に確認できる技術革新は、アシュール文化とよばれる石器技術の出現である。この技術の特徴づけるハンドアックスやクリーヴァーという両面加工石器は、アーモンド形や尖頭形、楕円形などをしており、平たく鋭い刃が石器周辺に広く作られている（図 4）。この石器を作るには、それ以前（例：ドマニシの石器）と比べて、複雑な技術と高い計画能力が必要である。アシュール文化を示す両面加工石器は、レヴァント地方の海岸部や内陸部に加えて、アナトリアやコーカサス、アラビア半島などにおいて広くみつかっている。

そのアシュール文化の西アジアにおける起源を示唆する記録が、ガリラヤ湖の南 3 km に位置するウベイディヤ遺跡（約 140 万年前）から得られている。両面加工石器はまだ粗雑で、石核礫器、多面体石器、球状石器など、まだ人類が出アフリカを果たす前に出現した石器類（オールドワン文化）が認められる。かつて提起された「居住面」の痕跡は、湖畔における緩やかな流水によって

千年前	石器文化	遺跡名	
		レヴァント地方	それ以外
2,000	オールドワンの	ウベイディヤ	ドマニシ
1,000		ゲジェル・ベント・ヤコフ	
400	下部	アシュール文化	ベレハト・ラム
	300	ヤブルディアン、アムッディアンなど	ズッティエ
200	中部	レヴァント地方ムステリアン	タブンD層
		レヴァント地方ムステリアン	タブンC層、カフゼー、スファール
100		タブンB層、デデリエ、ケバラ、トール・ファラジ	ジェベル・ファヤドフアル
45			シャニダール

図 2 下部と中部旧石器時代の編年 (Armitage et al. 2011, Gabunia et al. 2001, Goren-Inbar 1985, Nishiaki et al. 2011)

遺物が運搬され堆積した結果だと現在は考えられている。また、少数の動物骨にのみカットマークが認められることなどから、この遺跡の居住民が積極的に狩猟を行った証拠はない。

その後起こった技術革新の証拠は、ヨルダン渓谷の低湿地に位置するゲシェル・ベノト・ヤコヴ（約80～70万年前）から発見されている。典型的なハンドアックスやクリーヴァーの両面加工石器が伴うアシュურიアン文化の遺跡である。注目されるのは、II-6層レベル1文化層で発見されたゾウの頭骨である（図5）。これが狩猟によるのか、あるいは死肉あさりや自然作用によるものなのかを明らかにするために研究が進められているが、少なくとも動物性食料が増加したことが示唆される。その一方で、果物や草本種子も食べていたようである。その残滓が残されていた上、堅果の加工に用いられたと考えられる窪み石が多数出土している。また、火の意図的な利用が行われていた証拠も得られている。

ゴラン高原北部に位置するベレハト・ラム遺跡（23～78万年前）から出土した「石製人物像」は、加工品としての是非が長らく議論されてきたが、顕微鏡観察と実験製作による最近の研究結果は、加工品と認めている（図6）。これが正しければ、アシュურიアン文化の時期には象徴的行動という点でも進化があったかもしれない。石器の特徴として、ルヴァロワ製品や上部旧石器の石器（端削器と彫器）の比率が高く、両面加工石器がわずかに含まれる。

こうしたアシュურიアン文化を担ったヒトに関する人骨化石の証拠は非常に限られているが、エル＝コウム盆地のナダウィエ・アイン・アスカル遺跡では、約45万年前と推定された地層からホモ・エレクトゥスと考えられる頭骨片が出土している。

## 2) 中部旧石器時代

### その夜明けの混沌の意味は何か？

以上のように、西アジアの下部旧石器時代は、（おそらく）ホモ・エレクトゥスによるさまざまな行動・認知能力が進化した時期と大まかに捉えられるが、下部旧石器時代

の終末から中部旧石器時代の初頭（約40万年～20万年）のあいだは、人類進化史上の混沌と暗黒期である。この時期にはアシュურიアン伝統に加えて、さまざまな石器文化が突然登場する。例えば、ヤブルディアンと呼ばれる石器伝統は、アシュურიアン文化に伴っていた両面加工石器がなく、単純な剥片を加工した道具が主体となる（図7）。その一方で、アムッディアンやブレ・オーリナシアンと呼ばれる石器伝統は、縦長の石刃を主体とする技術である（図8）。それに加えて、ルヴァロワ方式という石器技術が用いられる文化も出現した。さらに複雑なのは、これら新出の石器文化の一部に混じりながら、あるいは独立してアシュურიアン文化的な両面加工石器が存在する遺跡があることである。

興味深いことに、このような石器文化の多様化は、同時期の東アフリカや南アフリカからも報告されている（カプスリン層群やファウアスミス文化）。この時期は、私たち現代人（ホモ・サピエンス）が出現したと考えられている直前の時期に相当し、そのタイミングでヒトの石器文化に異変が起きているのは興味深い現象である。その意義の解明は、現代人の文化的由来を知ることにもつながると思われるが、この時期のさまざまな石器文化を担ったのは誰なのかについてほとんど分かっていない。数少ない例として、ヤブルディアン伝統の石器が出土したズッティエ洞窟（ガリラヤ湖付近）から頭骨が発見されているが、その種の同定に関する見解は一致していない。

### レヴァント地方ムステリアンという石器伝統

上述した石器文化の混沌期の後、ルヴァロワ技術を用いた一連の石器文化（レヴァント地方ムステリアン）が広く認められるようになる。この文化はさらに、タブンB型、タブンC型、タブンD型という3つの石器伝統に細分されるのが一般的である（図8）。タブンD型の石器伝統は、石刃と縦長ポイントの製作を特徴する。それと対照的なタブンC型伝統の典型は、求心方向や対方向の剥離によるルヴァロワ石核の調整技術である。最後にタブンB型伝統は、収束方向の剥離で調整されたルヴァロワ石核から短いポイントが作られるのが特徴である。

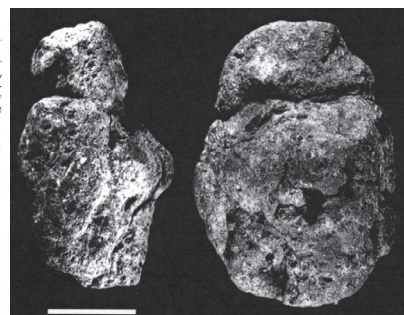
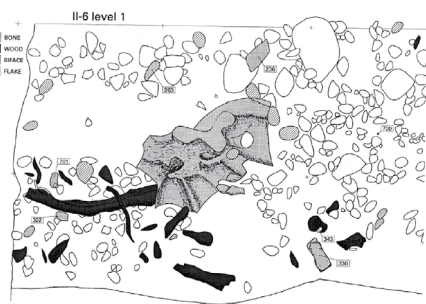
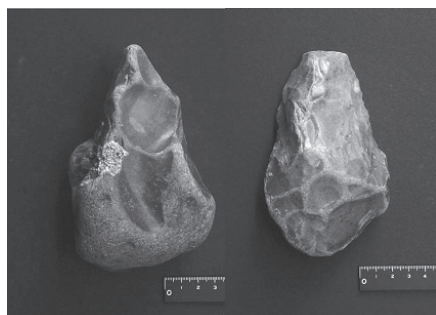


図4 アシュურიアン文化の石器(ハンドアックス) (ユーフラテス川中流域から)

図5 ゲシェル・ベノト・ヤコヴで出土したゾウの頭骨 (Goren-Inbar et al. 1994)

図6 ベレハト・ラム出土の「人物像」 (d'Errico & Nowell 2000)

これらタブンD型、C型、B型の石器製作伝統は、理化学的年代測定値と層位的出土例に基づくと、この順で25万年から4.7万年のあいだに継起したと考えられている。ただ、この3つの石器伝統が交替しながら起こったのか、それとも重複して存在した時期があるのかということが問題として残されている。

### 西アジアの中部旧石器時代にいた2つの人類

西アジアの中部旧石器時代には、ネアンデルタール人と現代人の両方がいたと考えられているが、特筆すべきは、現代人のほうがネアンデルタール人よりも古く住んでいた証拠が得られていることである。ケバラやアムッド、タブン、デデリエ、シャニダール洞窟などからみつかったネアンデルタール人の化石(図9, 10)は、中部旧石器時代後半(7.5～4.7万年前)に相当すると考えられるのに対し、現代人の化石(図11)が出土したカフゼーやスファール遺跡は、約13～7.5万年前と年代づけられているのである。

絶滅したはずのネアンデルタール人が現代人よりも後に現れたのはなぜか。その説明としては、20～15万年前のあいだにアフリカですでに出現していた現代人が、13万年前頃の気候温暖化に伴って北方へ拡散し、西アジアにも一時期居住したためといわれている。この現代人の西アジア居住が一時的で終わり、後にネアンデルタール人のみがあらわれた理由としては、インドネシアのトバ火山の大噴火に起因するともいわれる世界的な気候の寒冷・乾燥化が原因と指摘されている。この気候悪化に対応して、ネアンデルタール人はヨーロッパから西アジアへ南下し、西アジアのスファールやカフゼーにいた現代人はアフリカへ戻った(あるいは絶滅したか、化石を発見できないくらい人口を減少させた)と説明されている。

このように西アジアは、ヒトの進化において出現したさまざまな人類が移入、通過、交替した舞台として知られているが、そのドラマのシナリオは考古学の新発見によって常に書きかえられる。例えば、先述した約13万年前の気候温暖化に伴う現代人の一時的「出アフリカ」を示す証拠が最近追加されつつある。アラブ首長国連邦東部ジェベル・ファヤ地域からは、木葉形の両面加工石器を特徴的に含む石器群Cが出土した。また、オマーン南西部ドファール地域の数か所で採集された石器群には、ヌビア型ルヴァロワ方式の剥片剥離技術が明確に認められる。これらの石器群は共に約13～10万年前と推定されている。注目されるのは、これらの石器の形や製作技術の特徴が、同時期のアフリカ東部や北東部の石器と共通していることである。この点から、当時すでにアフリカに存在した現代人がアラビア半島南部へ拡散したと解釈されている。しかしながら、これに伴う化石人骨は発見されておらず、現代人のアラビア半島拡散の直接的証拠は将来の課題である。

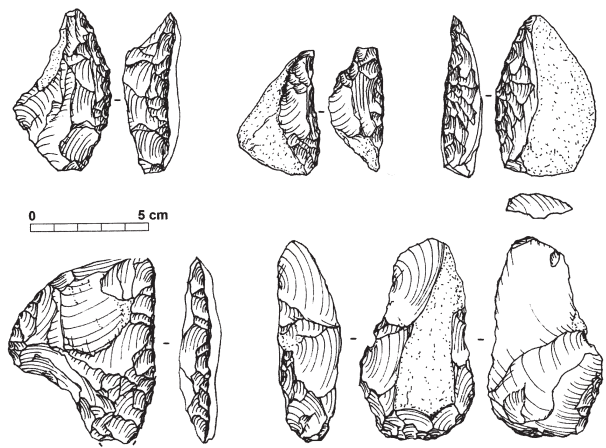


図7 ヤブルディアン石器 (Nishiaki et al. 2011)

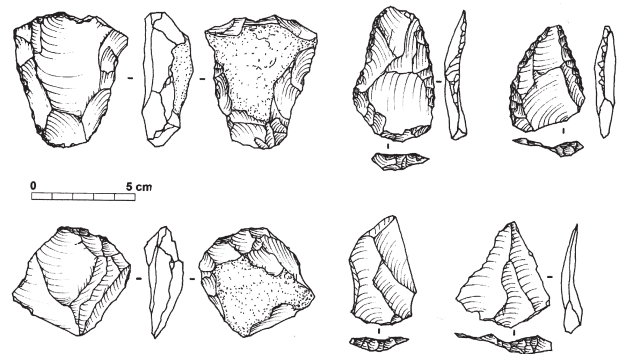


図8 レヴァント地方ムステリアン石器 (Nishiaki et al. 2011)



図9 ネアンデルタール人が出土したアムッド洞窟 (1960年代に日本隊が調査) (Suzuki & Takai 1970)

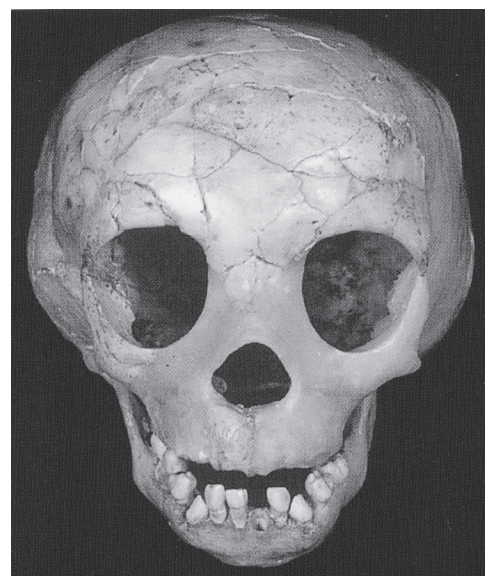


図10 デデリエ出土のネアンデルタール人骨 (シリア・日本合同調査隊が調査を続ける) (Akazawa & Muhsen 2003)

## ネアンデルタール人と現代人の行動と文化

西アジアの中部旧石器時代にいた2つの人類のあいだに、行動や文化の違いはあったのだろうか。石器づくりという点では、ネアンデルタール人の化石にはタブンB型の石器群が伴い、現代人の化石にはタブンC型の石器群が伴う傾向が認められるが、どちらもレヴァント地方ムステリアンの石器伝統に属し、その点で石器技術には大きな違いがなかったというのが大半の見解である。それでは食料はどうだろう。両人類の遺跡を比較できるほど資料は多くないが、ガゼル、ダマジカ、アカシカ、ノロジカ、オーロクス、野生ロバなどの有蹄類や、捕獲しやすい大きさの爬虫類（カメやトカゲなど）の骨が中部旧石器時代の遺跡で発見されている。これらの動物を狩猟した証拠としては、ルヴァロワ技術を用いて作られた尖頭器（ルヴァロワ・ポイント）があげられる（図12）。この石器の先端部が衝撃によって破損したケースがみられることや、その先端部がロバの顎骨に食い込んで出土した例がある。

このように野生の動植物を得て生活していたのであるが、一箇所にとどまっていたら資源が枯渇するので定期的に移動する必要がある。その移動の仕方は、ネアンデルタール人と現代人で違っただろうか。それを知るために、遺跡から出土したガゼルの歯のセメント質成長線を調べる方法がある。この分析結果によると、タブンB層やケバラのようにネアンデルタール人骨が伴う遺跡は複数の季節に居住されたのに対し、タブンC層やカフゼー XVI～XXIII層のように現代人が出土した遺跡はより短期間に居住されたといわれている。つまり、現代人のほうが、季節的な移動性が高かったのではないかという見解であるが、これには異なる意見もある。次に、居住空間はどうであろうか。ネアンデルタール人の化石が出たケバラ遺跡では、長期間に何度も繰り返して火が焚かれた空間と、灰や動物骨などが捨てられた空間が区別されていたようである（図13）。また、南ヨルダンのトール・ファラジ遺跡では、炉や石器、植物珪酸体の分布状況が調べられた結果、活動場所や休憩場所が決まっており、簡単な風除けのような施設もあったのではないかと考えられている。その担い手はネアンデルタール人だったと考えられているが化石はない。

最後に象徴的行動についてふれたい。両人類とも埋葬行為を行っていたことは広く認められているが、問題はそれに副葬品が伴っていたかどうかである。ネアンデルタール人の場合、シャニダール洞窟の人骨付近で回収された花粉（花の存在を示す）や、テシク・タシュ遺跡（ウズベキスタン）の人骨に伴うアイベックスの角が本当に副葬品だったのかどうか問題として残されている。その一方、現代人の場合、カフゼーやスフル遺跡の埋葬に伴って発見され

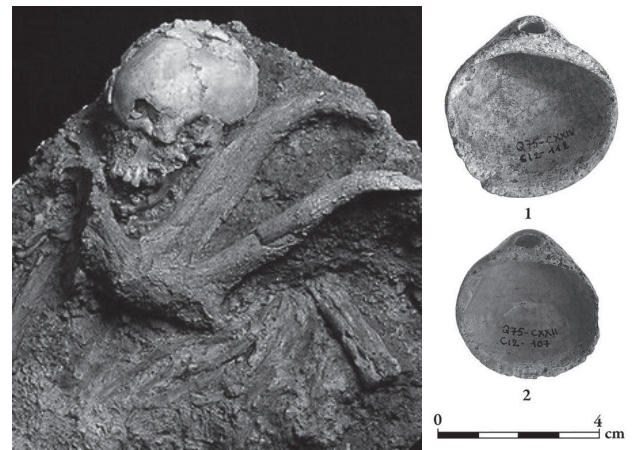


図11 カフゼーで発見された現代人の埋葬（シカ角が副葬されている）と地中海産の貝（Bar-Yosef et al. 2009）

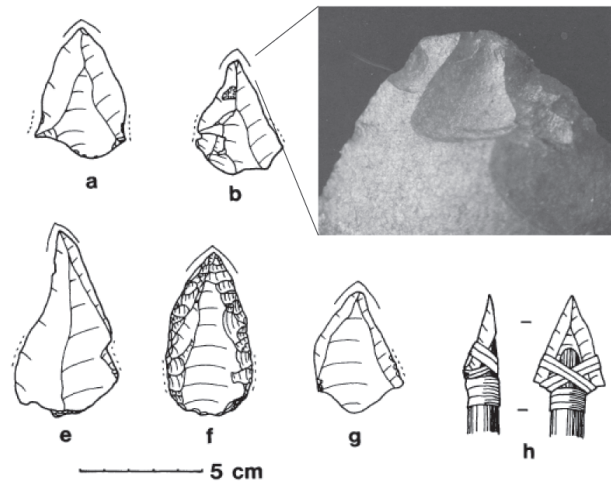


図12 ルヴァロワ・ポイントの破損と着柄復元（Shea 1988）



図13 左：ケバラ出土のネアンデルタール人骨（Bar-Yosef et al. 1992）、右：灰や炉址の厚い堆積（Goldberg et al. 2007）

たシカ角やイノシシの顎骨は埋葬儀礼の証拠として認められている。また、カフゼー遺跡では、80点以上の赤色顔料が発見されており、それが石器や地中海産の貝に付着していたことが報告されている。貝にあいている穴は自然作用の可能性が高いが、紐でつるさされていた痕跡がみとめられるという。こうした装身や遠隔地の物資調達、私たち現代人に特徴的な行動（現代人的行動）と考えられており、それがいつ、どこで、どのように発達したのかが考古学上の大きな研究課題である。



## 1.4 旧石器時代 (2)

本章が扱う約4.7万年前以降の旧石器時代は、日本やユーラシアの多くの地域では後期旧石器時代、アフリカなら後期石器時代に相当する。それに対し、西アジアでは約2万年前を境に上部旧石器と終末期旧石器の2時期に区分されることが多い。これは、西アジア特有の石器文化と生業・社会変化に由来するが、その変遷過程と意味をさぐる大きな研究課題となっている。

### 1) 上部旧石器時代

#### 起源論争

上部旧石器時代の開始は、文化編年上、上部旧石器初頭またはエミランとよばれる石器製作伝統に相当する。その特徴は、角錐状石核から剥離される遠端部尖頭形の石刃である。その石刃は、後の上部旧石器時代の石刃に比べて打面が大きく、しばしば打面調整される点で異なり、中部旧石器時代のルヴァロワ製品に似る。上部旧石器の石器（彫器や端削器）の比率が高く、エミレー尖頭器やシャンフランといった示準石器がしばしば伴う。その年代は4.7～3.3万年前（<sup>14</sup>C非校正年代）で、代表的な遺跡としてボーカータククト、クサル・アキル 25～21層、ユチャウズルなどがある。

エミラン文化の遺跡発見数は近年増加したが、その起源については議論が続いている。従来の解釈は、この石器伝統が中部旧石器から上部旧石器への文化的過渡期を示すという立場である。一方で、分子生物学から提唱された解剖学的現代人のアフリカ起源説を考古記録に積極的に読み取ろうとする立場によると、エミラン文化の担い手はアフリカから拡散してきた現代人だと解釈される。エミラン文化に伴う人類化石として、ユチャウズル岩陰から出土した歯が現代人のものと報告されている。

#### 石器文化の多様性とその意味

エミラン文化以後の上部旧石器時代に対しては、アハマリアンとレヴァント地方オーリナシアンという2つの文

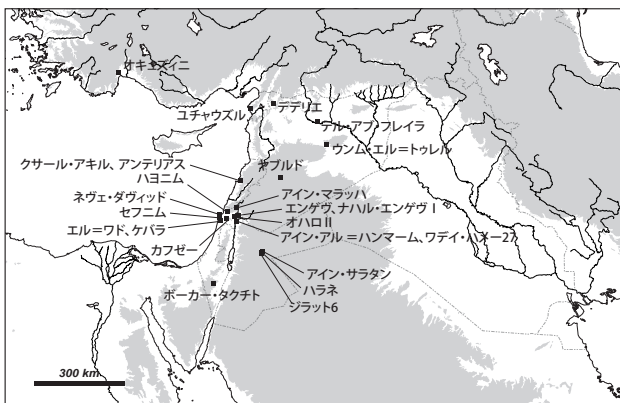


図1 本文で言及される上部と終末期旧石器時代の遺跡

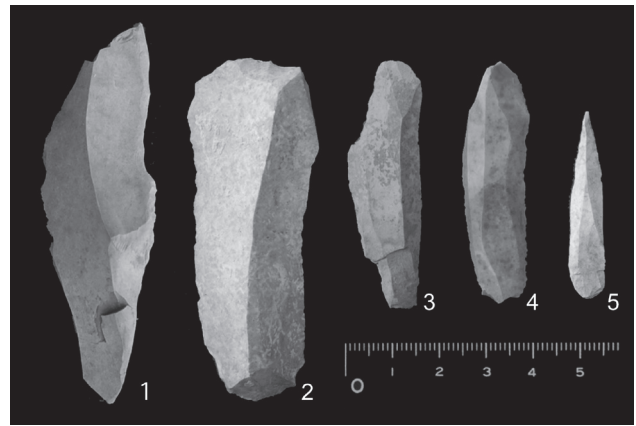


図3 上部旧石器時代の典型的石器  
(1, 4: 彫器, 2, 3: 端削器, 5: エル＝ワド尖頭器)

化区分が一般的にされてきた。この内、アハマリアンの方がエミランに続いて先に出現した。その開始年代は地域によって異なり、4.3～3.8万年前（<sup>14</sup>C非校正年代）である。アハマリアンの石器技術の特徴は、角錐状石核から剥離される石刃と細石刃で、それを素材としてエル＝ワド尖頭器や背付き石器などが製作される（図3）。アハマリアンは、前期と後期に細分されることが多い。後期アハマリアンの特徴は、前期に多いエル＝ワド尖頭器に代わってウシュタタ細石刃が増加する点と、細石刃製作技術が多様化する点である。さらに、後期アハマリアンの石器群には、オハロII遺跡のように、後の終末期旧石器時代の文化であるケバランに示準的な細石器の型式が含まれることがある。このように、石刃や細石刃の製作を基本とした技術伝統が、エミランからアハマリアン、そしてケバランへと連続的に変化する文化変遷が認められる。これは、エミラン文化を始点とするレヴァント在地の文化進化と解釈され、「レヴァント地方石刃系統」とも呼ばれている（図2）。

一方のレヴァント地方オーリナシアンは、アハマリアンに少なくとも数千年遅れて3.5万年前頃に出現した。その石器技術の特徴は、剥片の高い比率と剥片製彫器や削器、そして竜骨形石器から剥離される、ねじれた細石刃の高い

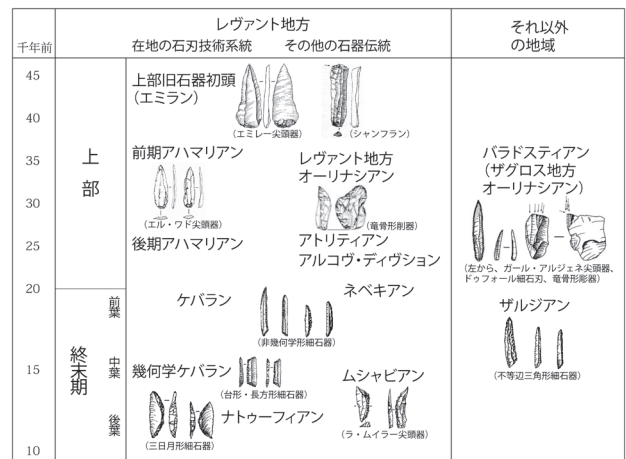


図2 上部旧石器と終末期旧石器時代の編年

(Goring-Morris & Belfer-Cohen 2006, Henry 1989, Marks & Kaufman 1983, Ohnuma & Bergman 1990, Olszewski 1993, Olszewski & Dibble 2006, Richter et al. 2010)

比率である。石器以外に、基部が二分した交叉骨製尖頭器やペンダントなどの装飾品が伴う遺物群がケバラ洞窟やハヨニム洞窟、クサル・アキル岩陰などから発見されており（図4）、「典型的」オーリナシアンと呼ばれている。こうした物質文化や石器技術の特徴は、エミランやアマリアンと相違点が多いため、レヴァント地方オーリナシアン起源はレヴァント在来でなく、ヨーロッパ南東部やザグロス地方などからの外来だと想定されることが多い。

従来は、レヴァント地方オーリナシアン文化を広く定義し、レヴァント地方石刃系統とは異なる石器群が全て含まれる傾向があったが、最近はより細かく石器文化を区別し、アルコヴ・ディヴションやアトリティアンといった石器文化が提案されている（図2）。これらの石器文化は、年代や技術的特長がレヴァント地方オーリナシアンとは連続しないため、別の外来集団によってもたらされたという解釈が述べられているが、その一部はレヴァント在来集団の環境適応の結果という説明もある。

#### レヴァントに「上部旧石器革命」はあったのか？

旧石器研究の歴史が長いヨーロッパでは、ネアンデルタール人による中部旧石器文化に比べて、ホモ・サピエンスが登場した上部旧石器時代にみられる様々な行動・文化の革新が「上部旧石器革命」あるいは「人類革命」と名づけられた。こうした革新的行動はしばしば「現代人的行動」と呼ばれるが、ヨーロッパを基準とした「革新的行動」が他地域に共通するとは限らない。そのため、日本を含むさまざまな地域において、それぞれの上部旧石器的行動が記述され、その評価が試みられている。

西アジアの上部旧石器時代に特徴的な行動の1つは乾燥地帯への適応と高い居住移動性である。湿潤な地中海性環境帯とステップ乾燥地帯の両方に上部旧石器遺跡が多く分布するが、どちらの地域にも共通して、遺跡規模が小さく文化層は比較的薄い。遺構として特筆されるのは、ガリラヤ湖南西岸の水面下に保存されていたオハロII遺跡における小屋の痕跡であるが（図5）、それ以外のほとんどは炉のみである。これは、上部旧石器遺跡のほとんどが短期逗留地であり、当時の人々の居住移動性が高かつ

たことを示すであろう。上部旧石器遺跡の居住期間が限られていたことは、ガゼル狩猟の季節性研究によっても示唆されている。また、カフゼー、セフニム、ケバラでは、中部旧石器層から上部旧石器層にかけてイエネズミなどの共生動物の比率が減少することも示唆的である。

上部旧石器遺跡から出土する哺乳動物の骨は主に有蹄類（ガゼル、ダマジカ、アカシカ、オーロクス、野生ヒツジ、イノシシ、ウマ類など）であり、中部旧石器時代よりも小型獣（ガゼルなど）に集中する傾向がある。また、クサル・アキルやハヨニム、ケバラ、オハロII遺跡では、小型動物（ウサギや鳥、小型のカメなど）が意図的に採取されていたといわれている。オハロII遺跡では魚の採取も確認されている。植物遺存体の保存は稀だが、オハロII遺跡からは野生オオムギやエンマーコムギを含む多種類の草本種子が回収され、おそらく磨石によって加工されていたことが、磨石に付着したデンプン粒の分析によって示された。

ヨーロッパや北アジアの上部旧石器時代に比べ、西アジアにおける芸術的遺物の出土は希少であるが、ハヨニム洞窟のレヴァント地方オーリナシアン層から出土した動物の歯牙製ペンダントや石灰岩板石への線刻（図6）は、ヨーロッパのオーリナシアンとの関連を示唆する。また、アマリアンとレヴァント地方オーリナシアン多くの遺跡から、顔料の破片や顔料が付着した石、または海産貝が発見されている。海産貝は、ユチャウズル岩陰やヤブルドII岩陰の例のようにしばしば穿孔されている。

上部旧石器時代の数少ない埋葬例が、クサル・アキルやナハル・エン・ゲヴI、オハロIIで検出されている。それ以外の人骨標本は、アンテリアス、カフゼー、ケバラ、エル＝ワドから回収されている。埋葬人骨の少なさは、上部旧石器遺跡の多くが小規模で短期逗留地的であることに関係しているかもしれない。

## 2) 終末期旧石器時代

### なぜ上部旧石器と区別されるのか？

この時代が上部旧石器時代から区別される大きな理由の1つは、旧石器文化の定義の基準となる石器技術であ

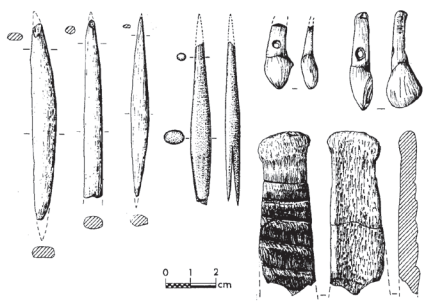


図4 ハヨニムとケバラ洞窟オーリナシアン層の骨角器 (Belfer-Cohen & Bar-Yosef 1999)



図5 オハロII遺跡の住居址復元図 (Nadel & Werker 1999)

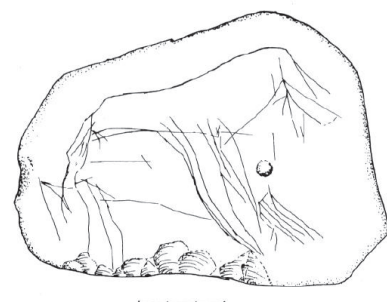


図6 ハヨニム洞窟オーリナシアン層の線刻画 (Belfer-Cohen & Bar-Yosef 1981)

る。具体的には、細石器の増加と多様化が西アジア終末期旧石器文化の特徴である（図7）。細石器の素材となる細石刃は上部旧石器時代の前半から存在するが、それに様々な二次加工を加えて作られる多様な定型的細石器が主要な器種となる石器群が終末期旧石器時代に含められる。細石器の形態や製作技術に基づいて数多くの石器文化が認定される一方で、それらをまとめる編年的枠組みとして、レヴァント地方の場合、終末期旧石器時代の前葉（2.2/2～1.6/1.5万年前）、中葉（1.6/1.5～1.3万年前）、後葉（1.3～1.1/1万年前）という時期区分が用いられている（いずれも<sup>14</sup>C非校正年代値）。

前葉の細石器は、背つぶしや裁断の二次加工をさまざまに組み合わせた非幾何学形が主体である。中葉の細石器は、台形・長方形や三角形などの幾何学形の増加で区別される。後葉は三日月形の幾何学形細石器が示準となる。さらに、細石器を製作するために細石刃を分割する方法の1つであるマイクロビュラン技法は、地理的・通時的に特徴的な出現パターンを示す。

#### レヴァント以外の細石器文化

ザグロス地方における細石器石器群はザルジアンと呼ばれるが、その年代データは限られている。トルコのアンタリヤ地域においても終末期旧石器時代の洞窟遺跡が多く発見されている。その中でもオキュズニ洞窟では、レヴァント地方やザグロス地方と同様に、非幾何学形から幾何学形細石器への通時的变化が層位的に検出されている。また、コーカサスやアナトリア東部、イラン高原にも幾何学形細石器を含む細石器石器群が分布し、それに対してトリアレティアンという文化が提起されている。

#### ナトゥーフリアンの特殊性

終末期旧石器時代後葉に相当するナトゥーフリアンは、物質文化の内容において、それ以前の時期とは一線を画する（図8）。打製石器のほか、磨製石器や装飾品、装飾モチーフ、建築物、埋葬などを基準として地域的通時的な変異が認められる。特に通時変異としては、前期と後期、時に終末期が区別される。ナトゥーフリアン期の人々の定住性の増加を示す証拠は格段に幅広く、石壁の住居遺構（図9）やそれに時々伴う柱穴や貯蔵施設、数多くの埋葬、遺跡の大型化、高密度な遺物堆積、そしてイエネズミなどの共生動物の増加などがこれまでに指摘されている。また、特定の季節を示す動物や植物の遺存体の検出や、ガゼルの歯のセメント質成長線の分析によって、ナトゥーフリアンの遺跡が複数の季節に居住されたことが示されている。

前期ナトゥーフリアンの遺跡の多くは中央～南レヴァント地方の地中海性環境帯に立地し（例えばアイン・マラハやエル＝ワド B 層など）、その遺物や遺構を基準として文化が設定されてきた。しかしそれ以外の地域でも、

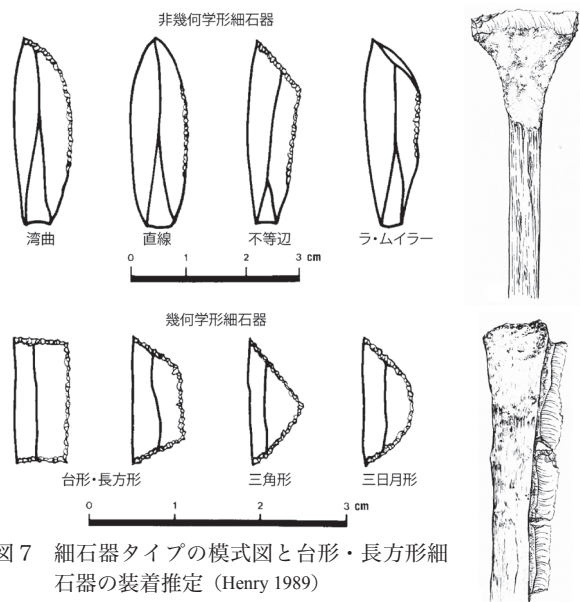


図7 細石器タイプの模式図と台形・長方形細石器の装着推定 (Henry 1989)



図8 植刃鎌や三日月形細石器などの集中部 (Hardy-Smith & Edwards 2004)

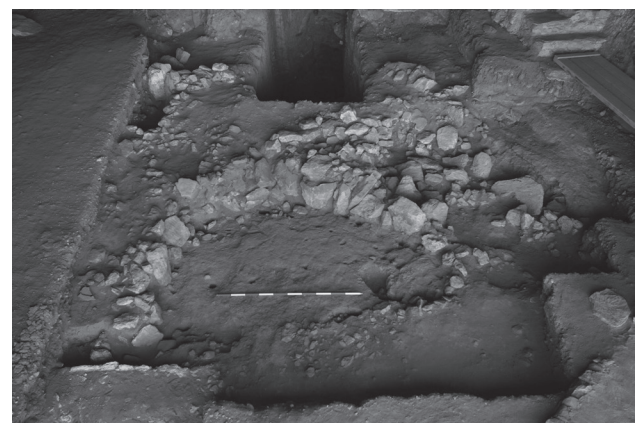


図9 デデリエ洞窟出土の住居 (シリア・日本合同調査隊が調査を続ける) (西秋ほか 2009)

ヨルダン内陸部のアズラク盆地に位置するアイン・サラタンや北西シリアのデデリエ洞窟 B 層などの遺跡が近年報告されており、前期ナトゥーフリアンの分布範囲の広さと文化の多様性が示されはじめています。

#### 生活の変化：居住、生業、交易、埋葬

このようにナトゥーフリアンの物質文化や生活様式の特長性は顕著であるが、それが突発的に生じたのか、それとも長期的変化の結果なのかについて議論されている。

従来は、終末期旧石器時代前葉と中葉の遺跡は一般的に小規模で文化層も薄いことから、移動性の高い居住が上部旧石器時代から継続していたと考えられてきた。しかし、前葉と中葉の遺跡の中には、流水などの自然作用による遺物拡散の影響を考慮したとしても、非常に大型の遺跡が発見されている（例えばジラット6）。その中にはさらに、エン・ゲヴ III やハラネ IV、ウンム・エル＝トゥレルのように、小屋の遺構が検出された遺跡や、ネヴェ・ダヴィッド、ハラネ IV、アイン・アル＝ハンマームのように埋葬遺構が伴う遺跡もある（図10）。このような例は、居住パターンの変化がナトゥーフリアン期に突然生じたのではなく、それ以前の時期にも遡ることを示唆する。

終末期旧石器時代の主な狩猟対象は、ガゼル、ウマ類、オーロクス、シカ類、ヤギ、ウサギ、カメ、鳥などである。ナトゥーフリアン期にも同様な種類の動物が捕獲されていたが、ガゼル狩猟がより集中的に行われたのが特徴である。植物質食料に関する直接的証拠は限られているが、アブ・フレイラやデデリエ、ワディ・ハマー27、ハヨニムの植物遺存体によると、オオムギやアインコルンコムギ、ライムギなどの野生穀物や、レンズマメやソラマメ類などのマメ類、アーモンドやピスタチオなどの堅果類、そして果物が利用されていたようである。ナトゥーフリアン期における穀物の集約的な利用は、光沢付き石刃や大量の食物加工具（特に石臼と石杵：図11）などの遺物（およびその機能分析）からも想定されている。

海産貝が広範囲の地域に流通する状況は、上部旧石器時代から終末期旧石器時代にかけて継続（おそらく増加）した。海産貝が内陸部の遺跡からも出土し、さらにその産地が石器製作伝統の違いによって異なる傾向は、しばしば穿孔される貝が交換品として集団間交流に用いられていたと解釈されている。エル＝ワド洞窟など前期ナトゥーフリアンの遺跡には、ネックレスや頭飾りなどの副葬品として貝製・骨製のビーズが出土した例があるが（図12）、その社会的意味の解釈が議論されてきた。

終末期旧石器時代は、上部旧石器時代よりも埋葬例が数多いのが特徴である（図10）。特に前期ナトゥーフリアンの集落遺跡では、家屋と考えられる石壁遺構の中や近くに埋葬が設けられる傾向がある。

このように終末期旧石器時代は、その開始からナトゥーフリアン期にかけて、定住性や穀物利用が増加し、埋葬行為や外来品交換が発達する傾向が一般的に認められる。これらの変化は、次の新石器時代に特徴的な定住集落や食糧生産、儀礼活動や遠隔地交易の前兆として理解されるこ



図10 幾何学ケバラン期(左)とナトゥーフリアン期(右)の埋葬(左:アイン・アル＝ハンマーム遺跡でキツネを伴う;右:アイン・マラッハ遺跡で子犬を伴う)(Maher et al. 2011; Davis & Valla 1978)

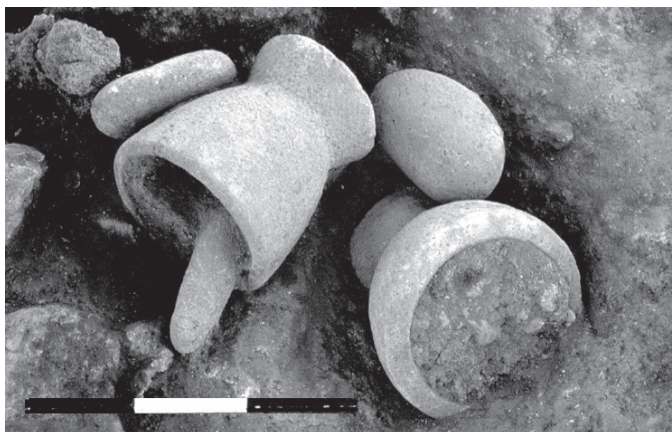


図11 ナトゥーフリアンの石臼と石杵(Hardy-Smith & Edwards 2004)



図12 ナトゥーフリアンの貝製頭飾りと貝・骨製ネックレス(Garrod & Bate 1937)

とが多く、その先駆けとなるような活動や物質が特に注目を集めて研究されてきた。

しかしながら、ナトゥーフリアンから新石器時代への文化的移行は連続的でなかった。例えば、ナトゥーフリアンの前期から後期への移行に伴い、多くの遺跡が廃棄された。新たに設けられた後期ナトゥーフリアンの遺跡も小規模で、次の先土器新石器時代 A 期を特徴づける集落の起源を直接的に求めることは難しい。

### 3.1 石器

岩石を素材とするさまざまな道具。動物や植物を切ったり削ったり、刺したりする用途の他、砕いたり、磨ったりして加工する用途にも用いられる。石器を作るために、素材となる岩石を叩く石（叩き石）も石器である。

#### 1) 石器の種類とつくられかた

石器を利器として用いる場合、ガラス質の岩石（西アジアの場合、フリントやチャート、黒曜石）を打ち割り（剥離）、得られる石片を利用することが一般的である（打製石器）。この時、打ち割られる石の素材が石核、剥離された石片が剥片と呼ばれる（図1）。これが最も基本的な石器製作の技術であるが、人類に獲得されたのは直立二足歩行より数百万年も遅れた（約250万年前のアフリカ）。道具となるのは剥片だけではなく、石核自体も道具としても用いられる。石核石器と一般に呼ばれるものである。礫の一部分のみに刃部が作られ、石核石器全体の形状は元の礫の形を残しているものは、礫器（あるいはチョッパー、チョッパー・チョッピング・ツール）と呼ばれる。このように、剥片と単純な礫器を主体とした石器技術は、西アジアの場合、下部旧石器時代のドマニシ遺跡（約180万年前）などで発見されており（図2）、いわゆる原人の骨が伴っていた（1.3参照）。

より時代が下ると、石核石器への加工の度合いが高くなり、その全体形状が整えられるようになる。その典型例として、ハンドアックスと呼ばれる石器がある。アーモンド形や楕円形などの平面形をして平たく、ほぼ全周に刃部が作り出されている。西アジアでは、下部旧石器時代のアシュურიアン文化にみられる。その原初的形態は約140万年前のウベイディヤ遺跡でみられ、その後、次第に左右対称で薄くなる傾向がある（1.3参照）。もし、ハンドアックスが出土したホロン遺跡の約20万年前という年代が正しければ、西アジアでは120万年間にわたって使われ続

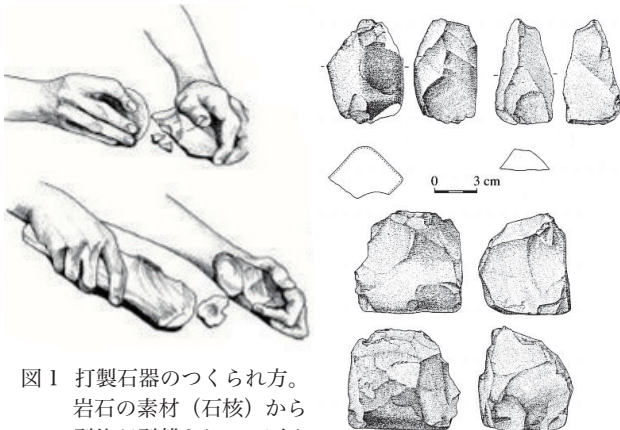


図1 打製石器のつくられ方。岩石の素材（石核）から剥片が剥離される。石や鹿角をハンマーとする。

図2 ドマニシ遺跡の礫器と剥片 (Gabunia et al. 2001)

けた石器の種類ということになる。

アシュურიアン文化期の終末頃から、石核のほうではなく、石から剥離される剥片の形態をコントロールする技術に重点が置かれ始める。この方法には2種類ある（図3）。1つは、剥片に細かな剥離を加えることによって変形させ、新たな形や刃部を作り出す方法である（二次加工）。西アジアのヤブルディアンという下部旧石器時代末の石器伝統では、分厚い剥片の縁辺に二次加工が加えられて作られた削器（スクレーパー）が特徴的である（1.3参照）。もう1つの方法は、石核の形を丁寧に整えることによって、剥片が剥離される前にその形状を用意する方法である。したがって、この方法によってうまく剥離された剥片には多くの二次加工を加える必要はなく、ほぼそのままの形で使用できる。この代表例が、西アジアの下部旧石器時代末から中部旧石器時代のあいだにみられるルヴァロワ技術である。この方法によって作られた剥片は縦長、楕円形、三角形の3種類に区分されることが多いが、その内の三角形は特にルヴァロワ・ポイントと呼ばれ、狩猟用の刺突具としても用いられたと考えられている（1.3参照）。

この2つの方法によって剥片の形を整える技術は、その後、西アジアでは青銅器時代までつづく石器技術の基本になる。異なるのは、どのような形態が作られるかである。約4.5万年前以降の上部旧石器時代には縦長の石刃とよばれる形態が多く作られるようになった。その内のアハマリアン文化では、先の尖った石刃が作られ、それにわずかの加工を加えるのみでエル＝ワド型尖頭器と呼ばれる刺突具が作られたのが特徴的である。終末期旧石器時代になると、剥片に二次加工を加える度合いが高くなり、組み合わせ道具の部品として利用された小型の石器（細石器）には、長方形、台形、三角形、半月形など多様な形態がみられる。さらに石器の形だけではなく、二次加工の方法自体も多様化し、マイクロビュラン技法とよばれる特殊な方法も現れた（1.4参照）。

新石器時代になっても、その前半は石刃製作技術が存続

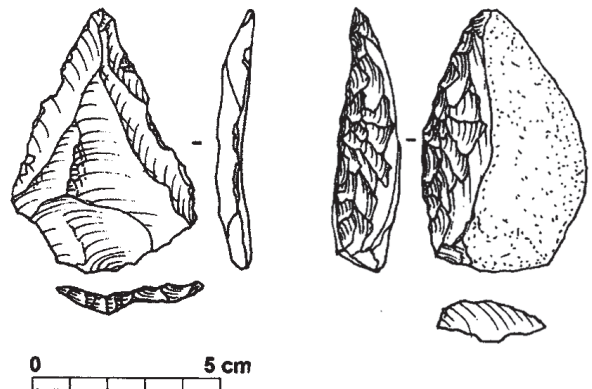


図3 異なる方法で作られた剥片の形 (Nishiaki et al. 2011) 左：ルヴァロワ・ポイント、右：ヤブルディアン・スクレーパー

し狩猟具や解体具が作られていた。その後、動物の家畜化が普及すると、新石器時代の後半期には石刃技術が一時衰退するが、銅石器時代の直前から再び復興し始める。この時の石刃は狩猟ではなく穀物収穫用の鎌刃の効率的量産を目的としており、青銅器時代におけるカナン石刃の専門的製作にいたる。

以上の打製石器とは区別して、磨製石器という種類がある。一般的には、食物を叩いたり磨ったりして加工する道具(図4)や、刃部を磨いた斧、石を磨いて作った容器(石製容器)などが含まれる。その素材には、玄武岩や石灰岩、砂岩、安山岩、フリントなどが用いられる。これらの岩石の形が既に用途に適している場合はそのまま使われることもあるが、変形が必要な場合は、<sup>あらわ</sup>粗割り、<sup>こうだ</sup>敲打、研磨などによって加工される。粗割りでは剥片が剥離されるので、その点では打製石器の製作と共通する。西アジアでは、終末期旧石器時代の中葉から新石器時代にかけて、穀物利用の増加とともに磨製石器が出土する遺跡数が増加する傾向があり、いわゆる農耕技術の発達を示す考古学的証拠として研究されている(1.5参照)。

## 2) 石器を理解する視点

石器の形や機能は時代や地域ごとに多様であるが、それを総合させた大きな視点から何が分かるだろうか？

### 人類進化との関わり

人類進化の文化的側面について教えてくれる証拠の1つが石器である。猿人、原人、旧人、新人と一般に呼ばれるヒトの進化において、自然環境だけでなくヒトの行動や技術が果たした役割が大きかったと考えられている。西アジアでは、石器を獲得してアフリカからユーラシア大陸へはじめて人類が拡散した足跡をみるだけでなく、加速度的に変化していく石器文化(オールドワン文化、アシュールアン文化、レヴァント地方ムステリアンなど：1.3参照)が、当時のヒトの生物学的進化段階(例えば、ホモ・エレクトゥス、ネアンデルタール人、新人)とどの

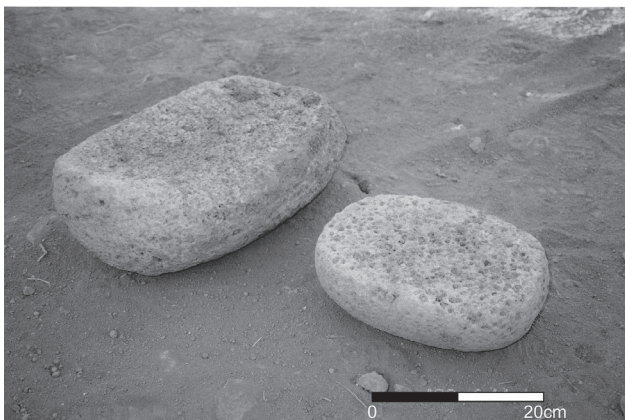


図4 穀物加工用の磨製石器(ヨルダン、ジクラブ渓谷、筆者撮影) 磨石(右)を石皿(左)の上で前後に動かして製粉する

ような関わりがあったかについて調べることができる。

### 人間社会との関わり

石器は、それを作り使う個人が属する社会の産物である。西アジアの場合、狩猟採集から農耕牧畜への経済変化を示す証拠の1つにもなるだけでなく(1.5参照)、それぞれの社会において伝達・学習される特定の石器の作り方や使われ方のパターンを同定することによって地域集団を同定したり、その社会関係を測る証拠にもなりうる。また、産地の限られた石器の素材(例えば新石器代の黒曜石)や専門的道具(例えば青銅器時代のカナン石刃やタビュラー・スクレーパー：1.8, 2.8参照)が広い地域から見つかる場合、その流通を可能にした社会のシステムを知る手がかりともなる。

## 3) 石器を調べる方法

このように、過去のヒトや社会に関してさまざまなことを石器から知ることができるが、知りたいことによって石器を調べる方法は異なる。しかしながら、石器を調べる上では、その素材が何でどこから得られたのか、素材をどのように加工して石器を作ったのか、どのように用いられたのか、どこに捨てられたのかというように、石器の製作から使用、廃棄の過程のいずれかに焦点をあてて調べ、その結果として復元される人間行動(石材採取や製作技術、使用行為、廃棄物処理)に基づいて過去のヒトや社会を議論するのが一般的な方法である(図5)。

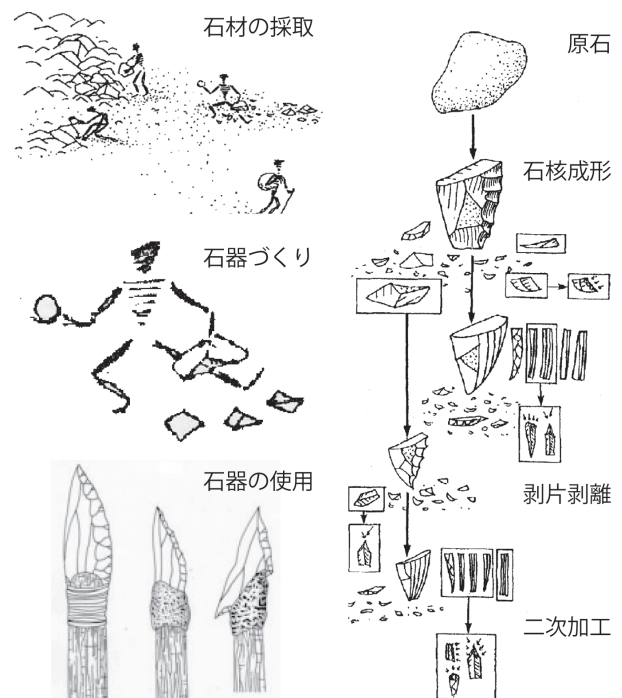


図5 石器の履歴(Inizan et al. 1992とUniversity of Wollongong)

どの石器にも、その素材となる石材が人間に獲得され、成形され、使用されるまでの履歴がある。遺跡に残された石器から、これらの活動を復元することが、石器研究の方法の1つである。

## 西アジア考古学講義ノート

2013年3月31日初版発行

**編集** 西アジア考古学講義ノート編集委員会

委員長 藤井純夫

委員 足立拓朗・門脇誠二・小高敬寛・下釜和也

編集補助 山藤正敏

**執筆** 藤井純夫 (1.1)

門脇誠二 (1.2, 1.3, 1.4, 3.1)

前田 修 (1.5)

小高敬寛 (1.6, 3.2)

下釜和也 (1.7, 1.10, 2.2)

須藤寛史 (1.8)

山藤正敏 (1.9, 2.5)

長谷川敦章 (1.11)

足立拓朗 (1.12, 1.13, 1.14, 1.15, 2.1, 2.4, 2.6, 3.4)

有松 唯 (1.13, 1.14)

近藤康久 (2.3, 3.8)

紺谷亮一 (2.6)

有村 誠 (2.7)

安倍雅史 (2.8)

馬場匡浩 (2.9)

上杉彰紀 (2.10)

津本英利 (3.3)

本郷一美 (3.5)

丹野研一 (3.6)

近藤 修 (3.7)

柴田大輔 (3.9)

**発行** 日本西アジア考古学会

〒305-8571 茨城県つくば市天王台1-1-1

筑波大学人文社会系歴史・人類学専攻 常木研究室

FAX : 029-853-4432

E-mail: jswaa@hum.u-tokai.ac.jp

**印刷** 前田印刷株式会社